

温故烧窯元記

我温故焼は江戸時代末期より中仙道美濃赤坂宿に住み初代温故は幼名を平七と称し、文政七年に生まれ叔父孫六が趣味で樂焼を作り楽しんで居るのに心惹かれ、自分又陶芸を志し、十六才にして奮然青春を土と炎に賭け、全国名陶の門を叩きその技法を探求中の半ばにして病を得一度帰郷、再び桑名の森有節氏を訪ね共に研究し、次いで尾張赤津の加藤春岱氏を訪れ師事すること三年、隅々今尾藩候武腰氏の招きを受け春岱氏と共にお庭焼として態望され、銘を魁翠園焼と言う、三年にして後辞し帰郷嘉永三年なり、同時にお茶屋敷に窯を築き、あらゆる物の製作に専念する。元来支那の朱泥焼に愛着を持ち、それに優る器を完成したく元土の発見に終日終夜遂に地元金生山の赤土と勝山の白土を發見、之を混合し釉薬を用いず、素焼の焼成に自己待望の所謂独創意類の色沢を出す事に成功した加うるに其素肌に金銀絵具を以つて薪絵模様を配し松皮の紋を工夫し、又刀刻を起こし極めて個性に富む技法を生み顧客の愛翫を得る事となつた 温故の銘は大垣藩家老小原鉄心翁の激讚に依り名附けられたのである又、小原鉄心翁の推奨に依り徳川將軍家に献上、維新となり皇室にも献上、共に嘉納統いて明治天皇の御買上の光榮に浴す千八百七十八年のパリ万国博、次いで米因シカゴ万国博にも出品して名譽大賞牌を受領す又その他の受賞多し

昭和四十七年七月重要無形文化財に指定され其技術保持の称号を受け茲に百五十年の伝統を継ぐ